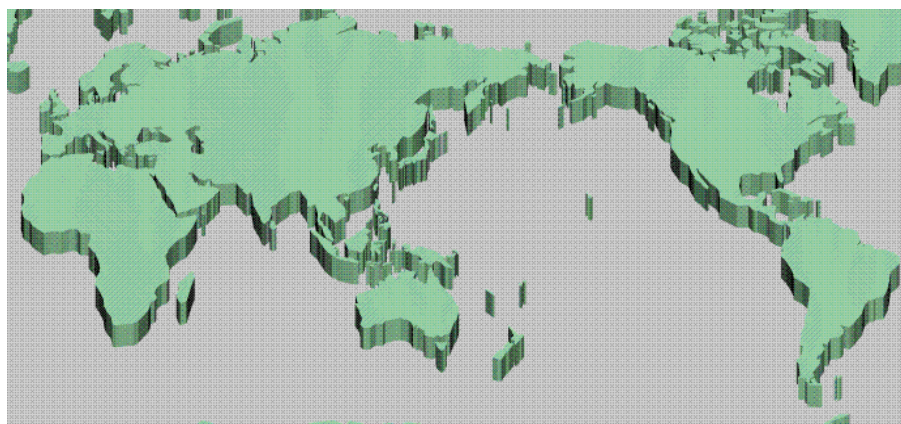


ニュースレター 第4号

2009年5月発行

科学研究費補助金基盤研究(A)

大学における宗教文化教育の実質化を図る システム構築



目次

1. 各グループの活動報告	2
2. 2009年度第1回検討委員会報告	5
3. 研究会の報告	5
4. 国際会議の報告	5
5. シンポジウムのおしらせ	6
6. アンケート調査結果について	7

1. 各グループの活動報告

下記のように第4回全体会議が開催され、2008年度の各グループの調査・研究の成果報告と、2009年度の活動計画について討議された。

○第4回全体会議

日時：2009年3月13日（金）16:00～18:30

会場：大正大学1号館2階122教室

出席者：研究代表者の星野英紀（大正大学教授）のほか、研究分担者・連携研究者・研究補助者を含め、計22名。

この会議で報告された各グループの研究実施内容は、以下のとおりである。

第1グループ報告

全体の統括を行なっている第1グループからは、2008年度の活動として、宗教文化士制度に関する検討会議の開催（2008年7月23日、同年9月12日）、国際日本検定協会への聞き取り調査の実施（2008年12月15日）、『英国学士課程教育 神学・宗教学分野資格水準』の翻訳、ご当地検定および留学生日本文化教材に関する資料分析等について報告がなされた。

また、2009年2月11日には、日本宗教学会の宗教文化士検討委員会、「宗教と社会」学会の宗教文化士ワーキング・グループと合同で、本科研メンバーから提出されたシラバスをもとに、宗教文化士制度のグランドデザインについての話し合いを行なった。

2009年度も、基本的には引き続き2008年度と同様の活動を行なう予定である。

第2グループ報告

教材の開発と資格認定試験の検討を目的と

した第2グループからは、2008年度の活動として以下のものについて報告がなされた。

- ・国際研究フォーラム「ウェブ経由の神道・日本宗教—インターネット時代の宗教文化教育のゆくえ—」の開催（2008年10月26日）
- ・研究会「海外勤務経験者の話を聞く会」の開催（計4回）（第7グループとの合同）
- ・第1回「宗教文化を広い視野から考える研究会」の開催（2008年2月1日）
- ・教材開発のための現地調査の実施（出雲大社、京都カトリック河原町教会等）
- ・宗教文化教育に関する学生の意識調査の実施（2008年10-12月、第4グループとの合同）
- ・宗教文化を学ぶためのリンク集の作成
- ・「博物館・資料館・美術館における宗教文化の理解を支援する展示の調査」の予備調査
- ・ニュースレターの刊行（第1～3号）
- ・ホームページの作成と管理

2008年度の活動のなかで特記すべきものとして、次の3点があげられた。まず、第3グループと合同で、「宗教文化士」（仮）の資格に関する学生のニーズ調査を実施し、計38大学5,005名の有効回答を得て、資格を「とりたい」14.5%、「条件によってはとりたい」42.9%という結果となり、過半数の学生がこの資格に肯定的であることがわかった。次に、第7グループと合同で、海外生活経験者等を招いての研究会を開催し、各地域の政治形態や社会情勢と宗教文化との関わりについての具体的な情報を提供を受けた。また職種や生活形態により、宗教文化についての知識のニーズが異なってくる点なども確認で

きた。国際シンポジウムでは、宗教文化教育の必要性が多くで重要な課題として認識されてきていることが明らかになり、議論を共有することの重要性を確認できた。

そして、2009年度の計画として、下記の活動があげられた。

- ・2008年度の活動の継続
- ・“Third Annual International Conference on Comparative Mythology”の共催

2009年5月23～24日 國學院大學学術メディアセンター

- ・「宗教と社会」学会第17回学術大会におけるテーマセッション「教育資源としての＜宗教文化＞—宗教文化教育はどんな学問領域に関わるか?—」

2009年6月7日 創価大学

- ・教材用コンテンツの作成

第3グループ報告

資格認定のためのカリキュラムの検討を行っている第3グループからは、2008年度の活動として、国際宗教教育学会での情報収集・交換、国際的な宗教学・神学の学術誌 *Teaching Theology and Religion* の編集委員会での情報収集・交換、国連の Education about Religions and Beliefs Clearinghouse（宗教文化教育に関する国際的ネットワーク）への参加の準備、国際日本検定協会の事務局へのインタビュー調査の実施（第1グループとの合同）等について報告がなされた。

そのなかでも特に重要な活動として、第1グループと合同でのグランドデザインおよびカリキュラムの検討、大正大学と國學院大學を例としたサンプル・カリキュラムの作成の2点について報告がなされた。後者に関しては、今

後のカリキュラムの検討作業のため、他のメンバーにも自分の担当する授業のシラバスの提供等の協力が求められた。

2009年度の計画として、各大学のカリキュラムの比較検討、パイロット校のカリキュラムに対する助言、カリキュラムに関する諸問題のさらなる検討等の活動があげられた。

第4グループ報告

学生のニーズ調査などを担当する第4グループは、メンバー欠席のため、事前に提出された資料をもとに、学生に対するニーズ調査の実施（2008年11～12月、第2グループとの合同）と、多文化共生教育における宗教文化教育の要素を探るための愛知県豊田市・豊橋市における面接調査の実施（2009年3月29～30日）について確認がなされた。

第5グループ報告

外来宗教の実態調査などを担当する第5グループの活動報告では、2009年に入ってから実施した富山モスク、浜松ブラジル人教会、滋賀県ブラジル人教会、大阪（出来島）モスク等についての調査と、北海道調査の報告がなされた（なお、第5グループでは、2008年度中に群馬県伊勢崎市のムスリムに関する調査および群馬県太田市・同県邑楽郡大泉町の調査も実施した）。

こうした実態調査によって、現在増加しつつある海外からの移住者が担う外来宗教（モスク、上座仏教寺院、ブラジル人労働者の集うキリスト教会等）が、日本各地で予想以上に教勢を伸ばしていることが明らかになった。

第6グループ報告

宗教文化教育に関する国際的な研究交流を推進する第6グループからは、以下の2008

年度の活動について報告がなされた。

・イギリス調査（2008年10月21～30日）
アバディーン大学、エディンバラ大学、グラスゴー大学、スターリング大学、ランカスター大学、バーススパー大学の6大学を回り、リサーチ・アセスメント・エクササイズ（イギリスの研究評価システム）等についての情報収集を行なった。

・カナダ調査（2008年11月5～7日）
カナダ・トロント大学の宗教・文化教育の研究者訪問（Ontario Institute for Studies in Education, University of Toronto の研究者2名、St Michael's College 学長）、および、学校現場（St. Joseph's College School）の実態調査を実施し、宗教・文化教育における大学と学校・教育現場の連携などについて情報収集を行なった。

・オーストラリア調査（2008年11月13～19日）
メルボルンのモナシュ大学とキャンベラのオーストラリア国立大学において、「宗教文化」に関わる大学の授業について8名の教員から聞き取り調査を行なうとともに、キャンベラのグラマースクールを訪問して高校の宗教教育についてデータ収集を行なった。

・香港調査（2009年2月10～13日）
教員養成機関であるとともに、宗教教育に関するセンターを有する香港教育学院と、メディア教育を宗教教育に役立てる試みをしている香港大学教育学部の Cheung Chi-Kim 教授を訪問した。それによって、多宗教社会である香港の宗教教育事情を知るとともに、異なる宗教文化に対する理解を深めていくうえで有用な情報を得た。

以上第6グループでは、2008年度中にイギリス、カナダ、オーストラリア、香港の中等・高等教育機関を訪問調査し、宗教・文化教育における教育現場の実態、研究者と学校教育者の連携、研究評価システム等について情報収集することで、「宗教文化教育」の方法論に役立つ知見を得ることができた。

2009年度の研究計画と主要な目標は、2008年度と同様、引き続き宗教文化教育に関する国際的な研究交流を推進していくことである。トルコでの海外調査と国際シンポジウム“Education on Religious Cultures in University Curricula”（8月10日 国立民族学博物館）の開催を予定している。

第7グループ報告

国外における関連の情報を収集する第7グループは、基本的に第2グループと合同で活動を行なったため、まとまった報告は割愛された。同グループでは、2008年度中、海外赴任経験者や外国人ジャーナリストを招いての研究会を、第2グループと合同で実施し、滞在期間の長短や現地の日常生活への関わり具合によって、必要とされる宗教文化の知識が異なる点を確認できた。

◇ 2009年度全体活動計画

井上順孝氏より全体構想に関わるものとして以下の提案がなされた。

- (1) 「宗教文化士」資格のシラバス認定・単位数・試験等の合意を目指す「検討委員会」の設置
- (2) 日本宗教学会および「宗教と社会」学会との関係の再編
- (3) 2010年度中の事務機関の発足のための

準備

(4) 2009 年度下半期の全体シンポジウムの開催

(5) 研究グループの再編

なお、本科研の全体の流れとしては、2008 年度の事前調査と情報収集の段階から、具体案の構築・コンテンツ作成の段階へと移行させていくことが確認された。

◇全体討議

全体討議では、以下の事項についての検討および決議がなされた。

- ・ 2009 年 8 月 10 日に第6グループが中心となって国際シンポジウムを開催するため、中牧弘允氏が連携研究者から研究分担者へと変更となった。また、塩尻和子氏が研究分担者から連携研究者へ変更となった。
- ・ 第7グループと第6グループの統合の検討
- ・ 2009 年度より発足する「検討委員会」は、各グループの幹事を中心に構成されることとなった。それにともない、議案の審議は、〈検討委員会からの原案の提出→第1グループで合議→メーリングリストでメンバーに報告〉というプロセスで進められていくことになった。日本宗教学会と「宗教と社会」学会への対応としては、本科研からの提案を各学会の理事会等において承認してもらう形式をとる。
- ・ 2009 年度に開催する全体シンポジウムについては、著名人の講演会、もしくは関連する各分野からスピーカーを招くシンポジウムを想定しており、そのための予算を確保する。

2. 2009 年度第 1 回検討委員会報告

全体的な議題について、グループ間の調整を図るため、本年度から新たに検討委員

会が設けられた。各グループから 1～2 名が委員となることと決まった。メンバーは次のとおりである。(五十音順)

稲場圭信、井上順孝、高田信良、平藤喜久子、藤原聖子、星野英紀、三木英、矢野秀武、弓山達也。

第 1 回検討委員会は、2009 年 5 月 6 日(水) 15:00～18:30、國學院大學学術メディアセンター 5 階で開催された。次のような点が 2009 年度の検討課題であることが確認され、議論が交わされた。

- ・ 履修と最終試験の方法の素案作成
- ・ 委託機関及び認定委員等についての素案作成
- ・ システム構築のスケジュールの提示
- ・ 教材開発の方針
- ・ 広報活動の推進

このうち、資格のために必要な各大学での履修単位については、16 単位を基準として考えていくこととなった。また最終試験は必ずしもすべての単位を取得していなくても、取得見込み者も受験できる方向で進めることとなった。

3. 研究会議の報告

第 2 回「宗教文化を広い視野から考える研究会」の報告

日時：2009 年 5 月 16 日(土) 15:00-17:00

場所：國學院大學・学術メディアセンター 5 階 6 会議室

講師：大角欣矢教授(東京芸術大学)

テーマ：「音楽は宗教文化とどう関わるか—ヨーロッパの事例を中心に—」

約 20 名の参加者が集まった本研究会では、西欧音楽史、特にルネサンス・バロックという

15世紀から18世紀中頃までのドイツ宗教音楽を専門とする大角欣矢氏に講演をしていただいた。講演では、古代以来世界宗教や多くの民族宗教にみられてきた音楽（「音」）の神秘的な力のあり方や、19世紀のヨーロッパ音楽から20世紀のニューエイジ音楽にまで至る反啓蒙主義・反近代合理主義を志向する宗教性を帯びた音楽の系譜が紹介された。

質疑応答では、音楽におけるカトリックとプロテスタントの違い、音楽と言葉（歌詞）との関係性、J-POPや日常音楽の宗教性など、さまざまな視点から質問や意見があげられ、活発な議論が交わされた。

4. 国際会議の報告

○第3回国際比較神話学会議 “The 3rd International Conference on Comparative Mythology”

日時：2009年5月23～24日

場所：國學院大學学術メディアセンター

主催：国際比較神話学会 “International Association for Comparative Mythology”

共催：科学研究費補助金基盤研究（A）「大学における宗教文化教育の実質化を図るシステム構築」

後援：ハーバード大学、國學院大學研究開発推進機構日本文化研究所

・基調講演会（一般公開）

5月23日（土）10:00～12:25

場所：國學院大學学術メディアセンター、常磐松ホール

開会挨拶：松村一男（和光大学）

歓迎の挨拶および共催プロジェクトの紹介：井上順孝（國學院大學）

基調講演（1）：吉田敦彦（学習院大学）

「大国主神と印欧語族の三機能システム」

基調講演（2）：Michael Witzel（国際比較神話学会会長、ハーバード大学）

「中央アジア神話と日本神話」

基調講演（3）：千家和比古（出雲大社権宮司）
「日本神話にみる基層心意：“出雲”の姿相・位相を踏まえて」

日本語・英語の同時通訳が付けられた基調講演会には、一般参加者も含めて数多くの方々が参加し、社会における神話に対する関心の高さが窺えた。

・ラウンド・テーブル

5月23日午後および24日午前・午後には、国内外の研究者たちによるラウンド・テーブル（使用言語、英語）が開かれた。両日合わせて14の研究報告が行なわれ、質疑応答が盛んになされた。

神話学と宗教教育をめぐる問題がテーマとなった24日午後のラウンド・テーブルでは、井上順孝氏が司会を務め、本科研のメンバーから下記の3名が報告を行なった。

土屋博（北海道大学）

“How to deal with Scriptures in Religious Education in Japan”（「日本の宗教教育において教典をどのように扱うべきか」）

平藤喜久子（國學院大學）

“Myth education from new perspective in Japan”（「新しい視点からの神話教育」）

月本昭男（立教大学）

“Death Is Inevitable – in the Case of Gilgamesh”（「死の不可避性—ギルガメシュの場合—」）

本科研が実施したニーズ調査でも明らかになったように、大学生たちの神話に対する関心は高く、日本における宗教文化教育にとって、今後、神話は重要なトピックとなっていくに違いない。今回の国際学会の開催は、本科研プロジェクトにとっても有意義なものとなったといえよう。

5. シンポジウムのお知らせ

○国際シンポジウム

“Education on Religious Cultures in University”

Curricula”（大学における宗教文化教育）

日時：2009年8月10日（月）

場所：国立民族学博物館

主催：科学研究費補助金基盤研究（A）「大学における宗教文化教育の実質化を図るシステム構築」

趣旨：本シンポジウムは、大学レベルにおける宗教文化教育について、国際的な視座から対話を進めていくことを目的に組織されました。シンポジウムでは、プロジェクトのメンバーによって集められたオーストラリア、イギリス、カナダ、香港のデータが、今後の議論のために報告される予定です。なお、本科研プロジェクトは、大学生に対して世界の宗教文化を教え、当該の分野の認定資格を与えるシステム構築を目的としています。

登壇予定者：

挨拶・星野英紀

座長・井上順孝、稲場圭信

イギリス・Peter Clarke（キングス・カレッジ）、Louella Matsunaga（ロンドン大学東洋アフリカ学院 SOAS）、田中雅一

ブラジル・Ronan Pereira（ブラジリア大学）、岩井洋

カナダ・Sarfarozi Niyozov（トロント大学）、稲場圭信

マレーシア・Shamsul Amri Baharuddin（マレーシア国立大学）

オーストラリア・Benjamin Penny（オーストラリア国立大学）、Wendy Smith（モナシュ大学）、中牧弘允

徐正敏教授（延世大学）

討論者・澤井義次、矢野秀武

* 問い合わせ先

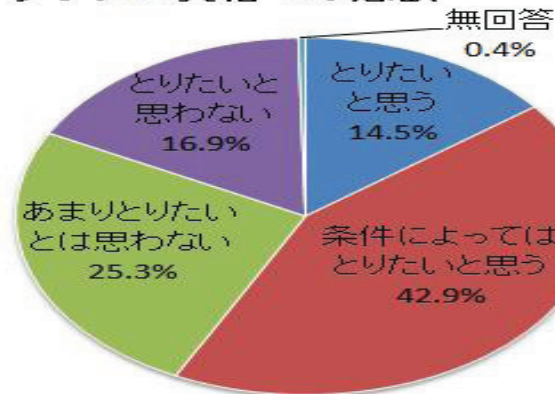
中牧弘允（国立民族学博物館）

6. アンケート調査結果について

本科研費によって平成20年10月～12月に全国38の大学で5005名の学生を対象としてアンケート調査が実施された。その結果は「宗教文化教育に関する学生の意識調査報告書」として、2009年2月に刊行された。

この調査は、「宗教文化士（仮称）」という資格に対して、現時点で学生にどの程度のニーズがあるかを調べるのが主目的であった。同時に宗教文化教育に関連するどのような講義内容に関心があるか、どのような学びが必要と感じられているかなども調べた。ポイントとなる点を示すと、この研究が目指している「宗教文化士」の資格については、過半数の回答者が「とりたい」

グラフ1: 資格への意欲

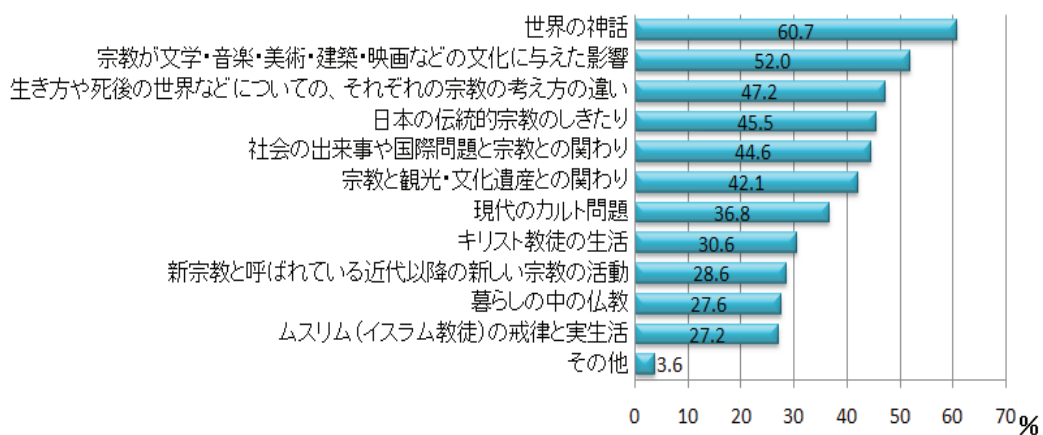


もしくは「条件によってはとりたい」と答えている（グラフ1を参照）。調査実施メンバーによる当初の予想を上回るものとなった。理系の学部の学生においてさえ、肯定的な受け止め方は3割を越している。学生の間には、こうした資格に対する一定の潜在的ニーズがあると言える。

また、どのような講義を履修したいかでは、「世界の神話」、「宗教が文学・音楽・美術・建築・映画などの文化に与えた影響」が上位となり、半数以上の学生が選んだ。逆に比較的少なかったのは「ムスリム（イスラム教徒）の戒律と実生活」、「暮らしの中の仏教」、「新宗教と呼ばれている近代以降の新しい宗教の活動」などで、3割を切った（グラフ2を参照）。

テーマごとの履修意欲の差は一定程度あるが、宗教文化教育に関係する講義を履修したいという希望は、平均して4割を超えている。今後宗教文化教育のシステム構築を具体化する上で、非常に参考になる結果であった。

グラフ2: 受けてみたい「宗教文化」に関する講義



なお、アンケートを実施した大学は次のとおりである。（五十音順）

- | | | | | |
|--------|------------|--------|-----------|---------|
| 愛知学院大学 | 青山学院女子短期大学 | 大阪国際大学 | 学習院大学 | 鹿児島大学 |
| 関西学院大学 | 関西大学 | 神田外語大学 | 関東学院大学 | 京都学園大学 |
| 京都女子大学 | 慶應義塾大学 | 神戸大学 | 國學院大學 | 国際基督教大学 |
| 駒澤大学 | 淑徳大学 | 上越教育大学 | 白百合女子大学 | 聖心女子大学 |
| 創価大学 | 大正大学 | 玉川大学 | 筑波大学 | 天理大学 |
| 東海大学 | 東京外国語大学 | 東京理科大学 | 東洋英和女学院大学 | 名古屋工業大学 |
| 南山大学 | 新潟産業大学 | 藤女子大学 | 北海道大学 | 立教大学 |
| 立正大学 | 龍谷大学 | 早稲田大学 | | |

科学研究費補助金基盤研究（A）

「大学における宗教文化教育の実質化を図るシステム構築」

（研究代表者 星野英紀）

発行 大正大学、國學院大學、大阪国際大学、神戸大学

発行日 2009年5月31日

URL: <http://www2.kokugakuin.ac.jp/shukyobunka/index.html>

E-mail: infoshubun@kokugakuin.ac.jp